

「グローバルCOEプログラム」(平成21年度採択拠点)事業結果報告書

概要

機関名	早稲田大学	機関番号	32689	拠点番号	K09
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなくローマ字) Kamata Kaoru (氏名) 鎌田 薫				
2. 申請分野	K<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学 Sport Sciences for the Promotion of Active Life				
研究分野及びキーワード	<研究分野:健康・スポーツ科学>(健康増進)(スポーツ生理学)(トレーニング医科学)(スポーツ経営学)(コーチング)				
4. 専攻等名	早稲田大学スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)					
6. 事業推進担当者 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [%]	計 34 名				
氏名	所属局(専攻)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー)					
Kanosue Kazuyuki 彼末 一之	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ神経科学 医学博士・工学博士	拠点リーダー、全体統括		
Higuchi Mitsuru 樋口 満	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	運動生化学 教育学博士	アナリシス&アセスメント領域(A領域)代表 (研究プロジェクト部門長)		
Tanaka Shigeo 田中 茂徳	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 客員教授 (国立健康・栄養研究所) H22. 4. 1. 追加	エネルギー代謝 教育学博士	運動の習慣化		
Obuchi Shuichi 大淵 修一	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 客員教授(東京都長寿医療センター研究所)	予防医学 医学博士	虚弱高齢者の介護		
Tanaka Masashi 田中 雅嗣	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 客員教授(東京都長寿医療センター研究所)	ゲノム医学 医学博士	ミトコンドリアDNA解析		
Saito Miho 齋藤 美徳	人間科学研究科人間科学専攻 教授	認知科学 博士(人間科学)	スポーツ心理環境設計		
Ishimi Yoshiko 石見 佳子	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 客員教授(国立健康・栄養研究所)	健康栄養学 歯学博士	女性高齢者と骨粗鬆症		
Yanai Toshimasa 矢内 利政	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	バイオメカニクスPh.D	アスリートの動作分析、プロジェクトIリーダー		
Suzuki Katsuhiko 鈴木 克彦	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	予防医学 博士(医学)	運動と免疫		
Muraoka Isao 村岡 功	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	運動生理学 博士(医学)	高齢者の健康(学内外提携部門長)		
Sakamoto Shizuo 坂本 静男	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	循環器内科学 医学博士	運動と虚血系心疾患		
Arao Takashi 荒尾 孝	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	公衆衛生学 医学博士	運動の疫学		
Masaki Hiroaki 正木 宏明	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ心理学 博士(人間科学)	認知機能とスキル獲得		
Imazumi Kazuhiko 今泉 和彦	人間科学研究科人間科学専攻 教授	運動栄養学 医学博士	運動と栄養補助		
Harada Munchiko 原田 宗彦	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ経営学 Ph.D	ビジネス&マネジメント領域(B領域)代表 (海外提携担当)		
Nakamura Yoshio 中村 好男	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	行動科学 教育学博士	応用健康科学(教育推進部門長)		
Thompson Lee トプ・リー	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	メディア論 学術博士	スポーツとメディア		
Sogawa Tsuneo 寒川 恒夫	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ人類学 学術博士	世界のスポーツ文化		
Honda Masaki 誉田 雅彰	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ工学 工学博士	スポーツと情報システム		
Shishida Fumiaki 志々田文明	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	武道論 博士(人間科学)	武道とスポーツ文化		
Hirata Takeo 平田 竹男	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ産業論 博士(工学)	トップスポーツビジネス		
Oka Koichiro 岡 浩一郎	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	行動科学 博士(人間科学)	中高年者の運動行動変容、プロジェクトIIリーダー		
Takenaka Koji 竹中 晃二	人間科学研究科人間科学専攻 教授	応用健康科学 Ed.D	子どもの行動		
Fukubayashi Toru 福林 徹	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	整形外科 医学博士	コーチング&クリニック領域(C領域)代表 (学内協力担当)		
Uchida Sunao 内田 直	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	精神医学 医学博士	メンタルヘルス		
Kawakami Yasuo 川上 泰雄	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	バイオメカニクス 博士(教育学)	トレーニング		
Akama Takao 赤間 高雄	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ医学 医学博士	アンチドーピング		
Kaneoka Koji 金岡 恒治	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	整形外科 医学博士	スポーツ障害予防		
Tomozoe Hidenori 友添 秀則	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	スポーツ教育学 博士(人間科学)	スポーツ倫理		
Tsuchiya Jun 土屋 純	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授	コーチング論 博士(人間科学)	コーチング、プロジェクトIIIリーダー		
Nagashima Kei 永島 計	人間科学研究科人間科学専攻 教授	環境生理学 博士(医学)	コンディショニング		
Mano Yoshiyuki 間野 義之	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 教授 H24. 4. 1. 追加	スポーツ科学 博士	エリートスポーツ		
Matsuka Hirotsuka 松岡 宏高	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 准教授 H24. 4. 1. 追加	スポーツマネジメント Ph.D	スポーツマーケティング		
Sakuno Sheichi 作野 誠一	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 准教授 H23. 4. 1. 追加	スポーツ経営学 学術博士	スポーツ経営学		
Tabata Izumi 田畑 泉	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻 客員教授 (国立健康・栄養研究所) H22. 3. 31. 辞任	健康科学 教育学博士	運動の習慣化		

(機関名: 早稲田大学 拠点のプログラム名称: アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学)

機関（連携先機関）名	早稲田大学
拠点のプログラム名称	アクティヴ・ライフを創出するスポーツ科学
中核となる専攻等名	スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー） 彼末 一之・教授 外 33 名
<p>〔拠点形成の目的〕 本拠点が目指すアクティヴ・ライフとは心と体の健康を指すのみならず、人々が活力をもって生きることのできる地域や社会のあり方をも含むものである。健康問題は日本だけではなく世界共通のものとなりつつある。そして、その解決にはスポーツ（運動）が大きな可能性を持つと期待され、スポーツ振興はあらゆる世代に求められるものとなっている。本拠点では高い専門性と幅広いスポーツ科学の知識を兼ね備えた人材育成のために、世界（特にアジア地域）の教育研究拠点を形成することを目的とした。その達成に向けた戦略的プロジェクトテーマとして以下の課題を設定した。</p> <p>プロジェクトⅠ： IT普及社会における子どもの体力低下抑止と健全育成促進 プロジェクトⅡ： 医療・介護（社会保障）負担の軽減と中高年の生きがい創出 プロジェクトⅢ： 人類幸福の実現のためのトップスポーツ興隆の方策追究</p> <p>本拠点では単にスポーツ科学を総花的に展開するのではない。3つの戦略的プロジェクトの有機的な連携を通して、本来アクティヴな存在である人間の健全性が危ぶまれている昨今の社会的背景やその改善策について理解が進み、子どもから高齢者、要介護者からアスリートまでのあらゆる人々のアクティヴ・ライフがさらに進むような新学問体系“Sport Sciences for Active Life”を構築することを目的とした。このような観点からのスポーツ科学を学修した人材はアクティヴ・ライフの実現にむけての、研究・実践の場で大きな力となると期待される。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>運営体制： 国際的拠点としてSport Science Center for Active Life (SSCAL) を設立し、教育研究活動の中核とした。そして国内では地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター、独立行政法人国立健康・栄養研究所、国立スポーツ科学センターとの提携体制を整えた。さらに教育研究の実践経験の場として各地の小学校や総合型地域スポーツクラブWASEDA Club 2000、本学体育各部、スポーツ医科学クリニックなどを有機的に組織した。このような内外のネットワークの中で行われる実践的なスポーツ科学の教育研究は本拠点採択後格段に進化し、海外諸大学との協力関係の確立とも相まって、アジア地域においてこの分野の中核として機能できるような体制が整ったと言える。</p> <p>人材育成： スポーツ科学の研究分野で不足している女性のプログラム参加を推進した。その結果本拠点に参加した博士課程学生の30%強を女性が占めた。社会人大学院生も9%であった。さらに海外からの留学生受け入れを積極的に進め、20%近くに達した。カリキュラムでは基礎科目・専門特論科目を学ばせ、さらに優秀な学生は海外へ派遣し、国際的に活躍できる経験を積ませる制度や英語による学位取得システムを整えた。さらに本学博士キャリアセンターや企業などと協力してキャリアパスを提示している。以上のような取組が功を奏して本拠点採択後博士課程学生数が増加した。また学位取得者の80%強は研究者としての職を得て国内外の大学や研究機関で活躍している。</p> <p>研究活動： 3つの戦略的プロジェクトで以下のような研究を行なった。プロジェクトⅠ： 小中学生の体力、身体組成、生活習慣についての実態調査を実施し、因子分析を多面的に行うことにより、子どもの体力に及ぼす要因を包括的に検討した。既存のフィールドのみならず、新たに開拓したいいくつかのフィールドでの調査は本事業終了後も継続する。プロジェクトⅡ： 地域のNPOとの協力関係が進展して、介入実験に参加する中高年対象の健康教室等が本学所沢キャンパスで盛んに行われるようになり、地域への貢献に本拠点が有効に働いた。本事業終了後も本学校友会（卒業生組織）の会員60万人を対象とした健康調査プロジェクトを今後20年間にわたって調査研究を行う体制を整えた。プロジェクトⅢ： トップアスリートの育成プログラムを、野球、陸上競技などモデルとなる競技を中心に開発・実践した。また地域密着型プロスポーツの発展と地域イノベーションに関する解明をサッカー、野球などで進めた。</p> <p>海外連携： スポーツ科学分野における国際ネットワークの教育研究拠点として、ケルン体育大学・ラフバラ大学・カルガリー大学と、アジア地域では5大学（北京体育大学、清華大学、上海体育学院、ソウル大学、台湾師範大学）と箇所間交流協定を結び、交流関係を確立した。外国人研究者14名を短期客員教員として招聘し、本拠点における教育研究に大きな力となった。また国際的な研究協力・交流の場として年2回国際シンポジウムを計9回開催した。以上のような取り組みの結果、主としてアジア地域から留学希望者が増加した。</p>	

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

国際ネットワークの構築：本事業開始に伴い、スポーツ科学における国際的な教育研究ネットワークの基盤として働きかけを行った結果、**ケルン体育大学（ドイツ）、カルガリー大学（カナダ）、ラフバラ大学（イギリス）**といったスポーツ科学の分野で先端的な大学と箇所間交流協定を結び提携体制を確立することができた。その他にアジア地域の5大学（**北京体育大学、清華大学、上海体育学院、ソウル大学、台湾師範大学**）とも箇所間交流協定を結んだ。これらの大学を中心として優秀なGCOE参加学生を派遣し、また優秀な研究者を短期間招聘して、英語による講義、共同研究などの相互交流制度を確立した。これらの交流活動は事業終了後も継続する予定で、本拠点を中心とした国際ネットワークを通してスポーツ科学研究が発展すると期待される。

GCOE関連留学生支援制度：本事業実施に関連して本学内にそれを支援する種々の制度が整備された。「グローバルCOE外国人留学生特別奨学金制度」は優秀な留学生を特にGCOEの拠点に受け入れるための制度で入学金、授業料相当額を支給し、さらに日本語教育などを行うものである。また「大学院博士課程若手研究者養成奨学金制度」は30歳未満の博士課程学生が授業料相当の奨学金を支給されるものである。以上の2つの制度は優秀な学生を博士課程に入学させるのに役立った。その結果、本拠点採択後、箇所間交流協定を締結した大学を中心に海外から博士課程への入学希望が多く寄せられるようになった。博士課程入学者に占める留学生の割合も顕著に高まった。

文部科学省スポーツキャリア大学院プログラム：これは、国際大会等で活躍を目指す指導者のキャリアアップや、トップレベルの競技者が大学院に進学して優れた指導者になることを支援するプログラム開発を体育系大学院を有する大学に委託する事業で、本学大学院スポーツ科学研究科が応募して採択された。GCOE事業の趣旨とも合致し、トップレベル指導者の大学院進学によるキャリアパス取得促進につながった。海外協定校など（ラフバラ大学、カルガリー大学など）から先進的な事例の調査・収集を行い、平成25年度に修士課程エリートコーチングコースを設置した。

国内外学会でのGCOE関連シンポジウム：各協定校および海外の有力校から多くの研究者・学生が集まって毎年2回開催したInternational Sport Science Symposium for Active Lifeでは毎回活発な議論が展開された。さらに、この国際シンポジウムとは別にミニシンポジウム、サテライトシンポジウムを毎年2~3件開催し、個別のテーマで多くの参加者を集めた。また、上海体育大学で開催された4th Shanghai International Forum on Exercise and Healthではプログラムの1つとしてSino-Japan Postgraduates Forumが企画され、本拠点で選抜した優秀なGCOE参加学生5名と上海体育学院の大学院生5名が発表を行った。さらに、日本発育発達学会では「アクティブ・ライフによる子どもの育成」というテーマで大会を開催、本拠点メンバーによるシンポジウム「IT社会における子どもの体力低下防止と健全育成促進—早稲田大学グローバルCOEの取り組み」も企画された（残念ながらこの大会は東日本大震災の影響で中止となった）。

実践研究のモデルスポーツにおける早稲田の活躍：プロジェクトⅢにおけるトップアスリート育成の実践モデルとして、本学競技スポーツセンターと協力して野球部、スキー部、体操部、競走部の選手のパフォーマンス・身体能力測定の実施、トレーニングの提案等を行った。その成果は着実に表れており、野球部は平成22年度大学日本一に輝き、スキー部も全日本学生優勝のほか、冬季ユニバーシアードにおいて全種目で入賞を果たす等、近年にない好成績を収めた。陸上競技では100m、やり投げでロンドンオリンピック（平成24年）への出場を果たした。また水泳では同オリンピックで銅メダルを獲得した。今後、このような実践モデルを発展させることで、トップアスリート育成の一般プログラムが開発されることが望まれる。

社会的な還元：プロジェクトⅠに関連して、地域の小学校との連携が進み、出張授業や研究測定結果の還元により、本事業の成果をフィードバックしている。また、プロジェクトⅡでは、地域のNPOとの協力関係が進展して、介入実験に参加する中高年対象の健康教室等が本学所沢キャンパスで盛んに行われるようになり、地域への貢献という意味でも本事業が有効に働いている。さらに本事業終了後も本学校友会（卒業生組織）と連携して会員60万人を対象に、健康に関する大規模なコホート研究を20年間にわたり継続することになった。これは広く社会に情報をフィードバックするという点において大いに期待される取り組みといえる。

「グローバルCOEプログラム」（平成21年度採択拠点）事後評価結果

機関名	早稲田大学	拠点番号	K09
申請分野	学際、複合、新領域		
拠点プログラム名称	アクティヴ・ライフを創出するスポーツ科学		
中核となる専攻等名	スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 彼末 一之 外 33 名		

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、本プログラムは早稲田大学におけるスポーツ科学研究領域の特色と実績をもとに、大学院教育研究の更なる国際的展開を意図して企画され、これに応じた学内組織の整備、研究戦略センターの設置と充実、海外大学との交流協定の締結の推進、また学内予算からの財政的支援も行われるなど、大学の将来構想に沿った戦略的な拠点として推進された。

拠点形成全体については、“Sport Science Center for Active Life”（SSCAL）を中核とした拠点運営体制が工夫され、海外主要大学との連携・交流、国際シンポジウムの定期的開催、留学生数の増加、地域の小中学校や早稲田大学校友会との連携による社会還元の仕組みづくり等に相応の成果が認められる。しかし、拠点の活動として設定された3つのプロジェクト個々の成果は認められるものの、国際的に卓越した新教育研究学問領域の拠点を形成するためには、プロジェクト間の有機的な連携による相乗効果の醸成が必要であり、これに向けた更なる工夫が求められる。

人材育成面については、学生の意識と志向、実態を把握し、英語教育の徹底、日本学術振興会特別研究員への申請の義務化、標準研究業績の明示、国際シンポジウムへの企画・運営参加、学生への経済的支援、キャリアパス支援等の手厚く練られた育成計画が奏功し、結果的に留学生を含む入学者数の増加、プログラム修了者のアカデミックキャリアパス形成に繋がったことは高く評価できる。しかし、海外留学を希望する若手研究者数が限られ、国際的に活躍する人材を想定通り育成できなかった点が残念であり、学位取得後のキャリア形成の仕組みづくり課題が残されている。

研究活動面については、地域と連携した子どもの健全育成のための取組、校友会員を対象とした中高年の健康増進に向けた大規模プロジェクト研究への着手、トップスポーツ興隆等、個々のプロジェクトについては相応の成果があったと判断できるが、独創的な新しい研究分野の創成や、地域の保健や医療行政を巻き込んだ俯瞰的・国際的共同研究にまで至っているとは言えず、今後の課題と判断される。

今後の展望については、補助事業終了後も海外大学との連携・交流の継続が見込まれているが、海外で活躍できる人材育成をも視野に、これらに対する具体的経済支援策が求められる。また、3つの研究プロジェクトについて、主として展開するキャンパスの所在地である所沢市や校友会などの組織的な協力による将来の拠点運営策が講じられていることは評価できるが、各プロジェクトは国民の健康に直結するものであり、いずれも一過性に終わらせるのではなく永続的に発信し続ける仕組みづくりが必要である。プロジェクト間の連携研究を強化し相乗効果が認められる研究を更に展開して、プログラム本来の目的を達成することが期待される。